

世代超え 100年つなぐ

球物語 白球昔と今 地域とともに

創部100周年の川越野球部は、南埼玉大会で紫村英敬監督(36)が初めて夏の指揮をとる。いつか母校の監督に……。現役時代の監督の存在が、いまにつながった。世代を超え、部にかかわる人々は途切れない。伝統校ならではのつながりが100年を支え、これからも支えていく。

川越 伝統の名の下に

下



練習試合でベンチで指示する川越の紫村英敬監督。川越市野町二丁目

「試合後の監督の顔を見て、高校野球の続きがやりたくなったんだと思う」と話す紫村監督の原点は、18年前の2000年夏。川越の三塁手だった紫村監督は、頭上高く抜ける球をばうせんと見送った。埼玉大会3回戦の松山戦で九回裏、左越えサヨナラ本塁打を浴びた。試合後、部OBであり、「鬼の指導者」と恐れられた横田雅之監督の顔が涙でゆがんでいたことを鮮やかに覚えている。



「いつか自分も川高の監督に」と思い続け、教職を志すも教員試験は3度落ち、企業で数年間勤務。28歳で教員採用され、3年前



浦和西の横田雅之監督

に川越に赴任がなかった。3年間は野球部長を務め、今春監督に就任した。当時の横田監督は56歳になり、浦和西野球部を指導しつつ、川越の部OBでつ

くるチームで自らも「マスターズ甲子園」に出場を続ける。元高校球児が母校OBチームで再び甲子園出場を目指す大会で、15年に川越OBチームは40人ほどで出場し、県大会を制覇。翌年の甲子園で一勝した。横田監督も投手として息子と参加。甲子園で勝ったときだけ演奏される「凱歌」が、応援部OBらによって甲子園で披露された。「この年で甲子園の土を踏み、一勝できたのはOBの層の厚さがあったこそ。本当に川高でよかった」

部OBは現役部員も気にかける。

紫村監督の同期で投手だった結城敏さん(35)は年数回、練習を見に来る。

「育ててくれた仲間や先輩がいた部に、何かお返ししたい」と思うからだ。

左投げの結城さんは、現役時代に練習を見に来た三つ上のOBにスクリーンボールを教わり、決め球とした。いまの部員で左腕金井拓真君(3年)は、結城さんからスクリーンボールを習った。それを派生させたチェンジアップが決め球だ。「OBから戦うためのヒントをもらった。夏に勝って、なんとかそのお礼をしたい思いがある」



紫村監督は今後、定期的にOBチームを練習に招き、現役部員と交流させる考えだ。「多様な考え方を先輩から学び、部員たちが自ら考えて最適なものを吸収してほしい」と期待する。世代を超え、これからもつながっていく。

川越の初戦は7月8日。紫村監督は「喜びを感じつつ、3年にとっても、自分にとっても悔いのない夏にします」

(今回で「地域とともに」編は終わります)

2階には高崎線など4種